

---

# 野ザル。をプロデュース

サトウ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

野ザル。をプロデュース

### 【Nコード】

N7784C

### 【作者名】

サトウ

### 【あらすじ】

あれ、どこかで聞いたことあるタイトル。内容。え！パクリ？

野ザル。をプロデュース

## 第1話「ガールズ・エンド」(前書き)

ジャンルはファンフィクションにしましたけれど、要は設定なんかをパクリ自分なりの小説にしています。

ってそれがファンフィクションですか。そうですね。

まあ、パロディですよ。パロディ……。

野ザル。をプロデュース

## 第1話「ガールズ・エンド」

学校へ行く途中に（つまり通学路ってやつだ）葬儀場（いわゆるセレモニーホールってやつだ）がある。行きは朝早いこともあり、ただ通り過ぎるだけだが帰りは「今日は誰か死んだ、死んでない」と横目で確認するようになった。

ただでさえ葬式のような授業を受けたあとにそんな確認をする自分が嫌になるが、もはや（漢字で書くとも最早だ）日課となってしまう。今日も横目でチラリと見て喪服姿の人をみかけ「今日も誰か死んだのか」と思った自分はその直後、思わず2度見していた。そう、一瞬敵に気づかなかったジャッキー・チェンばりの2度見だ。

多分これがコメディ映画だったら迷わず電柱にぶつかるところだが、俺はすんなりと自転車をとめてその「喪服の人」のそばへ近づいた。「喪服」と思ったのは俺の高校の女子の制服だった。つまり、その制服を身につけた彼女は俺に制服を喪服と思わせるほどの暗さでポツンと。ほんと、音が聞こえるぐらいポツンと葬儀場の前に突っ立っていたのだ。彼女の名前は猿野申子。最近転校してきて、あまりの暗さにいじめられ始めていた。もちろん俺はそんなことに興味もなかったが傍観者の時点でいじめっこだ。それくらいの自覚はある。まあ、その自覚ってやつが俺に彼女に声をかけさせた。

「おい何やってんだよ」

「.....」

「おまえクラスに馴染んでねえもんな」

「.....」

「ほら、あれだ、ハロウィンつつう行事が日本に馴染んでないぐらい馴染んでないもんな」

ここで俺はずっと温めてきた例えツッコミ2つのうちのひとつを使

った。まさか実生活で使えるとは思っていなかったので俺は密かに心の中でガッツポーズをした。ちなみにもうひとつの例えツッコミは「お前は始めてのデートがスケート場で手を繋いで手袋越しでありながらも関わらずドキドキしてる中2の男子生徒か」だ。俺の絶妙な例えツッコミにも何の反応も示さない。

「お前なあ、さっきからセリフが『…………』なんだよ。言ってる意味わかる？その前に俺わかる？同じクラスの…………」

「あたし…………」彼女がようやく口を開いた。相変わらず「…………は多いが。つつか俺にも「…………」を使わせやがって。」

「あたしが死んだらお母さんここでお葬式あげてくれるかな」

「いや、ありえねえよ」

「だって新しい家狭いし」

「そういうことじゃなくて」

「あ、私の葬式になんて誰もこないから狭い家でもいいって意味」

「だー、もう。違うつつうの、なんだ、お前死のうとしてんの？俺はな、なんかのドラマ見てえに『じゃあ死ねば』つつつて冷たくつきはなしておいて説得するような手は使わねえぞ。死ぬな。それだけだ」

「私が死んで悲しむ人なんていない」

「あーもう。お前はなんでそんなマニユアル通りなんだよ。俺が『俺が悲しむよ』なんて言うと思ったら大間違いだぞ。死ぬな。しか言わん」

「じゃあ、死なない」

「よーし、それでこそ…………しまった。このままではアンガールズのネタ「何も考えないで『それでこそ』って言っちゃった」になっちゃう。何かうまく逃れなければ。「それでこそ、俺が見つけた原石だ」「ゲンセキ？」「そう、お前は土台はモウマンタイだ。俺がお前をプロデュースして、脱いじめられっこ宣言させてやるよ」

野ザル。をプロデュース

「プロデュース・・・」

「そう、いつとくが『今日の何某』は毎回お前だ」

「あ、内P・・・」

「そうか内Pわかるか。なら話は早い。まずは・・・」  
「こつして俺のプロデュース生活が始まった。」

## 第1話「ガールズ・エンド」(後書き)

ずいぶん前にかいた作品で他所のブログにのつけてました。完結しています。が、順番にのつけていきます。ドラマ版を見てイツキにこの第1話を書き上げました。原作本はコレを執筆中に読破しました。

野ザル。をプロデュース

## 第2話「モンスター・ワーク」

「おっちゃん、ちよいと奥借りるよ」

俺は理容ナカニシの扉を野ザル（彼女のことはそう呼ぶことにした。猿野申子。サルノシンコ。だからだが、「申」もサルって読む事に気づいたのはもっと後のことだ）を連れて開けていた。

「お、おまえが女の子連れてくるなんて、紀子ちゃん以来じゃねえか」

「ちよつと待つてよドク。その話はしない約束だぜ」

「オーケイ、マーティ」

ナカニシヤスシ  
中西靖史という「最後の雨」という名曲を歌った歌手と漢字は違えど同姓同名の理容ナカニシの店主とはもう10年以上のつきあいになる。理容ナカニシは自分の家から徒歩5分の距離にあり、ものごころついた時からそこで髪を切っていた。今となつては「髪を切る」以外の目的で友人たちとの溜まり場になつたいた。

「まあ、パート1とパート2でジェニファー役も代わつてることだしね。あとでこの娘のカットよろしく」

「はいよ」

おっちゃんは映画好きで冒頭と今の会話もそれが顕著に表れている。2人ともバック・トゥ・ザ・フューチャーが大好きだ。そして無論、俺の口グセは「ヘヴィだ」だ。しかし、おっちゃんは発明家でもないし、俺は「チキン」と言われても怒らない。

「さあて、どうするか」俺は野ザルを店の奥の六畳の部屋に招き、冷蔵庫から500ミリのペットボトルのコーラ（もちろんペプシ）

を2本を出して、1本を差し出した。オドオドしながらも彼女は受け取った。そして俺は会議モードに突入しようとした。成り行きとはいえ彼女をプロデュースしなければいけない。作戦を練らねば。

「ノリコって同じクラスのハミガさんですか」

「まあな。おまえ、転校生なのにもうフルネームで覚えてんのか。

そっぴいや自己紹介まだだったな。俺の名前はセンマルリヨウ。数字の千にお城の本丸の丸。田村亮子のいや谷亮子の亮。難しくいえば、ナベブタにワにルだな。で千丸亮」

「私は・・・」

「いいよ、ホームルームで聞いたから」

「ハミガさんと付き合ってるんですか」

「付き合ってた。だな。もう別れたけど。で、それよりも、プロデュースだ。髪型

はあとでおっちゃんに、そうだな。初期のウチダ・・・いやヒロスエでいこう。とにかくショートカットだ。これはだな。俺の好みによるところが大きいけど、髪形を変えるって重要だ」といいつつ、変えるといったら髪形しか思いつかなかっただけだったりする。

「そして次に重要なのはキャラ作りだ。俺は『ツンデレ』でいこうと思う」

「ツンデレって何ですか」

「わかんないか。帰ってググレ」

「ググレ・・・」

「ググるも知らないか。じゃあヤフレ。これは俺のオリジナルだけど」とネットで「ググる」という文字を初めてみたときから「なぜこの言葉はないのか」と思ったヤフー愛用者の俺は言ってみた。

「ま、いいや、とにかく普段は強気な女の子。ところが好きな男の前では女の子らしいつつ。そのギャップがいいわけよ。まずこれでクラスのアキバ系をガッツリ掴むんだ。このアピール法はあとで考えるとして。次にイジメだな。なんとなくいじめられているのに

は気づいてたけど……。ごめんな傍観者で。まあ、ここまできたからにはイジメから救わなきゃ始まらない。誰だ首謀者は？」

「……」

「いえよ」

「ノリコ……さん。ハミガノリコさん」

なんてこった。通りで転校生がフルネームで覚えるわけだ。

「しょうがねえな。明日ノリコに話すよ。まかせとけ元カノだ。つつつわけで今日はこれでおしまい。髪切ったら帰っていいよ。散髪代は出しとくよ」実は散髪代はツケのまま、もう5万ぐらいになっている。

「そして、今日の何某だ、行くぞドンドンドン」

「……ベタです……」

「ヒヤア」俺はさんまさん並みの引き笑いをして言った。

「やっぱりお前とは気が合いそうだ」

### 第3話「フューチャー・イン・ザ・ダーク」

俺がノリコとつきあった理由はいわゆる「ノリ」だった。センマルリヨウで千丸亮。ハミガノリコで葉見賀紀子。もうお分かりだろう。センガンリヨウ（洗顔料）とハミガキコ（歯磨き粉）。これで2人が付き合わないわけがない。俺にとってこの偶然は付き合う理由としては充分だった（いつも迷うけどコレ『十分』でもいいのかな）。おかげで奇面組カップルと呼ばれた俺たちの恋は2ヶ月で終わった。（高校生のくせに奇面組とかネタが古いのは作者のせいだ）。まあ、彼女もいい加減俺が「ノリ」で付き合っていることに気が付いたつてわけだ。それに俺が「童貞」だというのも彼女が嫌だったらしい。ヘヴィだ。クラス1の美女は「童貞」がお気に召さないらしい。その本意はわからないが、「処女」を好きな中年オヤジと同じ感覚・でもないか。実は俺は童貞ではなかったのだが（詳しくはいずれ発表される前日談『野鳥』をプロデュース』で明かそう）。彼女にはそう言った。なぜか嫌悪感を持った彼女とその後ギクシャクしてしまい、結果別れることになった。俺としては高校生活を童貞キララで過ごすつもりだったので、いや変なこだわりだけ。訂正する気にもなれず俺の童貞説は学年中に広がった。実は「なら私が初めての人に」と手を上げる女子がいることを密かに期待している自分があるのだが、今だ立候補者はいない。ウーム。キャラ変更でいくべきか。しかし、もったいないことをしたかもしれない。「ノリ」とはいえクラス1の美女と言われる女の子と付き合えていたのだ。そんなに俺はモテルほうではないというのに。少なくともテレフォンショッキングでタモさんに「学生時代モテたでしょ？」とは言われないルックスだ。

「な〜に考え込んでんの？リヨウちゃん〜ん」

クラスで仲が1番いい、堀部圭太が話しかけてきた。こいつはこれまた同じクラスの勝俣国男とお笑いコンビ「フォーク&リフト」を組んでいてヒマさえあればネタみせをクラスにしている。俺はいつもこの3人でつるんでいる。やっぱりクラスにはいろんな派閥があって、秀才組、スポーツ組、不良組、ヲタク組ぐらいに別れているのだが、俺達3人はどこにも属さず、どのグループとも比較的仲がいい「要領いい組」だ。

「なんか話せよ」さすがにお前の紹介をした。とは言えないので適当に相槌を打つことにした。

「別に」

「またまた〜お前ノリコちゃんの方を見てただろ？」クニオが話に加わる。クニオ、お前の紹介は終わったよ。お前がボケでケイタがツッコミって言うのは忘れていたけど。今は昼休みで皆弁当を食べたり騒いだりと思いきいに時間を潰していた。

「いや、ちよつと話があつてさ」

「ヨリ戻したいのか？」

「ちげえよ。それよりさ。転校生、髪切ったの気づいた？」

「ああー。あの暗い子ね。まっ何気にカワイイ気はする」

「初期のエンクミみたいだな」

おかしい。初期のヒロスエを意識したハズだが。まあ、彼女のヨサに気づいてくれただけでもありがたい。

「つうわけで今日の放課後ナカニシに集合な」

「何が『つうわけで』だよ。意味わかんねえ」とケイタがつつこんだ。

「でも、久しぶりだな。リョウがナカニシに召集かけんの。夏休みの『潜水艦事件』以来か？」とクニオが余計なことを思い出した。

「何にせよ、なんか企てるなお代官様」

「そちも悪よのう・・・ホッホッ」

「ま、大黒屋や越前屋並みの悪巧みではないけどな。とにかく集合話しはそれからだ。この話は他言無用だからな。俺、ノリコに話してくっわ」と言って俺はノリコの席へと向かった。仲良しグループの輪の中で話をしていた彼女はこちらに気づくと一瞬間がこわばったがかわまずしゃべり続けていた。彼女の席の周りに群がる女の子達に目配せしながら俺はズンズンと彼女に近づいた。

「あのさあ、ノリコ。いや、ハミガさん。ちょっと2人で話してえんだけどさ」

目配せ効果のおかげで取り巻きの女子はいなくなっていた。

「何？」

「そんなコワイ顔すんなって何も教室の中心で愛を叫ぶわけじゃねえからさ」

彼女を中心に女の子達が群がっていることを皮肉ってみたがソレはどうやら伝わらなかつたようだ。

「私、忙しいの」チャンスだ。俺は彼女の耳元でささやいた。

「イジメでかい？」彼女の顔がこわばる。

「ごめんねえ。教室の中心で愛をささやく。でもなくて」

今度の皮肉は伝わつたに違いない。

「何が言いたいわけ？」

「ここじゃあ、なんだからさ。廊下で話そうぜ」

彼女はだまって立ちあがり、俺に教室を先にでるように促した。

「オウケイ。さすが初代ジェニファーだけのことはある」

「何それ？」

俺が彼女に近づいたあたりからクラス中が注目していたのには気づいていたが、俺達が出て行った後のクラスのざわめきが予想できた。ほぼ1ヶ月ぶりのツーショット。大物芸能人なら、写真誌の見開きものだ。ま、かまやしない。こっちはこれから宣戦布告をせにやらん。

野ザル。をプロデュース

#### 第4話「アワー・サウンド・アワー」

俺とノリコは廊下に出て向き合った。

「おまえがさあ、転校生いじめてるってウワサを小耳にはさんでねえ」

「はあ、何言ってるの、あんたあの子に惚れてるわけ？」

「いやいや、違うよ。なんつうか、正義の味方ってやつ。見方を変えてみても味方だよってやつ？」このネタがわかる人はホントに少ないだろう。

「ねえ、フジコちゃん」

「は？」

「俺とお前は今、フジコちゃんとルパンの関係なんだよねえ。着かず離れずのこの距離感。そしてお互い共通の財宝をみつけちゃったわけ。当然、ルパンとしては財宝を横取りしたいわけよ。いや、マジメな話。イジメなんておもしろくないことやんなよ」

「いじめてなんかいいわよ。ただ・・・」

「ただ？」

「暗いから、なんかムカつく」

「そうか・・・」

俺はノリコの背後にある掲示板にはってある紙きれが目に入った。

「じゃあさ。彼女が変わったら、考えなおすよな」

本当はどんな理由があろうとイジメはやってはいけないと言ってやりたかったが、次のプランが思い浮かんだ俺はそれを実行することにした。紙切れをはがすと彼女に見せた。

「これで、優勝したら仲良くしてくれよな」

「優勝できたらね」彼女は不敵な笑みを浮かべたがその理由はまだ俺にはわからなかった。

「オツケイ！契約成立」。とっつあんが来たから俺はこれで」

学年主任の英語教師福田幸治通称「フクジ」が現れたので俺は去ることにした。

何かと俺を毛嫌いしているがその理由はわからない。クラスでもそこまで目立っていないというのに。俺はクラスのポジション的には上の下くらいで、自分ではかなり絶妙なポジションに昇り詰められたと思っっている。腕時計（映画スピードでキアヌ・リーブスが着けてたGショックと同じモデルだ）を見ると昼休みはまだあと10分あった。真っ直ぐ隣りのクラスへ向かう。お目当ての女の子はすぐに見つかった。

幼なじみの南洋子だ。あと1文字で長門の嫁さんになれた女。学年1の美女と言われるほどで、俺の絶妙なポジションは彼女と仲がいいというのも一役かっている。

まあ、彼女と近づきたいがために俺に近づくヤツは無視してるが。そっぴやケイタも多分その理由だったが俺は彼のキャラに惹かれて現在に至っている。

「ミナミ」苗字ではあるが「ミナミ」なので「タッチ」に憧れる俺としてはこう呼んでいる。

「なあに。たっちゃん」

俺は思わずキョトンとした。

「いっつも言ってるじゃん、1度でいいから『たっちゃん』って呼んでって」

いきなり夢が叶えられた俺は苦笑いした。

「あんがとさん。甲子園には連れて行けないけどな」

「で。なんなのたっちゃん」

「もういいよ。次はヒロで頼むよ」もう時代はクロス・ゲームなのに。まあ、いつの時代もミツル・アダチは最強だ。

「ちよっとお願いがあんのよ。今日ナカニシ集合で」

「わかった。潜水艦事件みたいな無理なお願いはダメだよ」

「もうその話はいいつて。ところでお前、俺と同じクラスの浅田と仲いいよな」

「うん。1年の時同じクラスだったから。たまに一緒に帰ってる」

「じゃあ、ひとつめの頼み。俺のクラスに来た転校生について聞いておいて欲しいんだ。その、いじめられているらしくて」

「わかった。それとなく聞いておく」

「サンキュ。あっお前もイマドキの女子高生なんだからメイク道具は常に持つてるよな」

「うん」

「それ重要だからよろしく」

「女装でもするつもり？」

「もっとおもろいことだよ」

俺はさつき掲示板から拝借した紙切れを親指と人差し指でつまんでピラピラっとした。それには「文化祭 アニメ研究部&科学部共催 第1回『萌えモエ選手権』」と書かれていた。さあて、これから忙しくなるぞ。(なぜ科学部が共催なのかは後ほど説明しよう)。

## 第5話「アンド・アイ・ニード・ユー」

「お待たせー。ワリイ。家にいったん帰ったからさ」

俺はできるだけ明るい声で、理容ナカニシに入って行った。いち早く部屋の微妙な空気感を察知していたからだ。案の定、ケイタ、クニオ、ヨウコとは距離を置いて野ザルが座っていた。

「おーい。リヨウちゃん。なんでこいつがココにいるわけ」ケイタが不満そうに述べる。

「なんでって。コイツが主役だからだよ」  
「主役？」

「こいついじめられてるらしいんだ。本人から聞くのもなんだから情報收拾頼んだんだけど」俺はヨウコの方を見た。

「今日、ミヨと帰って何気なく聞いてみたけど、ノリコのグループがシカトし始めて、周りが逆らえられないらしいの」

「そうか。まだシカトまでなのか」

「そこまでは詳しく聞けなかった」

「どうだ、野ザルその辺は・・・」

「野ザル？」ようやくクニオが口を開いた。

「サルノだからノザル。まあ、コードネームみたいなもんだ、で、どうなんだどれくらいイジメなんだ？」こればかりは今、本人に聞いておかないと手遅れになる。

「・・・今日、体育のジャージを隠されて探したら、ゴミ箱にあった・・・」

「マジでか、エスカレートしてきたな」

「それで、どうするんだいリヨウちゃん」

「ただ、イジメを止めさせるんじゃないかと、野ザルをプロデュースして人気者にしちまう。そのためにココで髪も切った」

「そうそう。デビュー当時のスズキアミみたいでかわいいと思ったのよ」ヨウコが言った。おいおいヒロスエはどこへいった。どこへ。「そういうことかあ。なるほどね。よしノった」クニオは興味津々のようだ。

「しょうがない。つきあうか」とケイタ。

「私にできることがあれば。言っておくけど、『潜水艦』の時のスクール水着は嫌だからね」とヨウコ。

「オツケイ。みんなありがとう。早速、作戦会議だ」

「・・・みんな。ありがとう・・・私のために・・・」

「まず、お前のその暗いところを変えたいけどな。とりあえず外見から変えていこう。これに着替えてきてくれそこトイレだから」俺は家から持って来た紙袋を渡した。

「アネキの今の彼氏がコスプレ好きらしくてさ。借りてきた」

「コスプレ？ いったい何を始めるつもりなんだ」

「まずはこれで優勝を目指す」俺は「萌えモエ選手権」のチラシを見せた。

「これかあ、文化祭まで1ヶ月あるけど、なんとかなるのか」

「言っておくけど、文化祭ネタは野ブタのドラマ3話の予告を見るまえに思いついたんだからな」

「誰に説明してんだよ」

「とにかく、俺の計画はこうだ。まず、彼女には駅前の『ステファニー』でバイトしてもらおう。面接のアポもとってきた」

ステファニーとは秋葉原からあきらかに遠い俺らの地域で最近オーブンしたメイド喫茶で、ものめずらしさからか、けっこう流行っている。俺も1回だけ、どんなものかとケイタ達と行ったことがある。「あそこはウチの学校のアキバ君たちの御用達だ。あの店である程度の人気を持たせる。けして野ザルだとバレないようにな。そして、萌えモエ選手権でその正体をばらすことで、絶大な化学反応を起こす。名づけてケミストリーと君を探してたく大作戦だ」

「あのさあ。アキバ君たち限定だろ、それでどうにかなんのか」

「大丈夫。いまや電車男やなんやらでヲタクへの認識は変わってきている。それに1ヶ月の間でその他の計画もある」

「ひとつ問題があるぜ」とケイタが言った。

「あの店はホントにカワイイって子しかバイト雇わないって有名だ。ウチの学校のコスプレ四天女王全員ダメだったぐらいだ。あの4人だつてけっこうレベル高いのに」

「安心しろ、おーい着替え終わったたる出て来い」

野ザルがオドオドしながらも出てきた。メイド服に着替えていた。

「とりあえずメガネ外してくれ」

「ヤバイ。やばいよ〜リヨウちゃん。イケんじゃね」クニオがウキウキしている。

「科学部が開発したモエボタンで満モエも夢じゃねえな」ケイタはボタンを押す仕草を試みせた。

「な。モエー。モエー。だろ。俺はコイツの底力を一瞬で見ぬいたんだからな。で、とりあえず、学校ではそのダサダサメガネでいいや。まだ正体を明かしたくないからな。バイト用に、コンタクトを買おう。そして、モエモエ選手権ではカワイイメガネで勝負だ。メガネ萌えも捨てがたいからな。ヨウコ、バイト中用のためにメイクを教えてやってくんねえか。こいつ、何も知らないからさ」

「わかった。今度うち来なよ。学校でいじめられたら頼ってもいいし。ミヨだつてホントはシカトしたくないって言ってるんだから大丈夫だよ」

「よし。じゃあ、行くぞ、今日の何某も野ザル」

「・・・お帰りなさいませ。ご主人様・・・」

「モエーモエーモエー」ケイタとクニオが騒ぎ始めた。

「お前、どこでそんなこと覚えた？」

「Pが・・・メイド喫茶で働けつていうから家でググるの意味をヤフってみてそこから調べた・・・」

「最高。Pってなんだ？」ケイタが聞いた。

「いや、俺がプロデューサーだから、P。内Pのノリで何某もやつ

てるわけ」

「でも内P終わったじゃん。今度内村プロジェクトがあるらしいけど」

「それ、いいな。野ザル・プロジェクト略してNP。なんかゴロ悪いな。ユニットつけよう。俺たちはチームだ。NP.U。そうだ。みんな俺からの着信音はCTUのヤツにしておいてくれ。俺からの電話に出るときは『こちらNP.U、アルメイダ』で」

「みんな、アルメイダかよ！」ケイタの三村ツツコミ。

「そう。俺だけジャック・バウワー。よし、メイクが終わったら履歴書の証明写真とコンタクトつくりにくぞ！明日は面接だ」

「チョマ、チョマ、チョマ待てよ」クニオのホリのキムタクのモノマネのモノマネ。

「なんだ？」「コンタクトとかけっこうするだろ資金源は？わかった実は野ザルん家金持ちなんだろ」

「ばーか。違うよ。俺がなんのために親から散髪代もらってここをツケにしてもらってるかわかってねえな」

俺は表で小学生の髪を切っているおっちゃんに聞こえないように小声で言った。

## 第6話「シユーストリング・バンド」

「おっちゃん、もう誰か来てる？」

「いや、まだだよ」

今日は野ザルがバイトを始めて1週間目の日だ。「暗い」ところが不安ではあったが無事、店長のオメガネにかなって採用された。根がマジメなおかげで、モクモクと仕事をしているらしいが、その報告会とこれからの作戦を兼ねて理容ナカニシに集合することになっている。ペプシを飲もうと冷蔵庫を開けると袋に入った「青ノリ」が落ちてきて床に青ノリがブチまかれていた。

「ヘイ！ドク！俺がトウルーで今日が2度目の今日だったら、間違はなく青ノリの袋はきちんと……。いや、青ノリは冷蔵庫に保存するなって言っておくね」

と店の方に声をかけた。

「あ？トウルーってなんだ？」おやつさんはコーヒーをすすりながらこたえた。

そうだった。2人とも海外ドラマは好きだけど、おっちゃんは「Xファイル」で止まっていて俺は「24」から始まっているんだった。

「……私はツイン・ピークスが好き……」

「野ザル。いつの間に……。つうかお前は俺の心が読めるのか？」

「……やっぱりバヒルとアリーマイラブ、フルハウスも捨てがたい……」

「スピン・シティを薦めておくよ」

「……知らない……」

「マイケルと言えば？」

「・・・ジャクソン?・・・」

「J・フォックス。言っておくけどジェイミー・フォックスじゃねえからな」

「・・・ファミリーサイズ・・・」

「知ってんじゃねえか・・・」

マイケルは関係ないけど、天才少年ドギー・ハウザーも最強だよ。つうか腹減ったな」

つうか、俺も「24」以前もけっこう知ってんじゃん。

俺は携帯を取り出してクニオに電話した。

「こちらNPU、アルメイダ」正直この約束を守っているのはクニオだけだ。

「あ、腹減ったからさ、野田ベーカリーでいつものやつよろしく」

「妻が誘拐されてるんだぞ!」

「おまえはトニー・アルメイダだろ?」

「ばっかだなあ。お前シーズン3で・・・」

「それ以上言っな!」電話を切る。ヤバイ。シーズン3はまだ見えない。「野田ベーカリー」とは学校の近くのパン屋で俺はその「厚焼き玉子のふんわりツナサンド」が大好物だった。

「どうだ。バイトは順調か?」

「・・・少し慣れた。笑顔が難しい・・・」彼女は笑ってみせた。

俺はその笑顔に少しドキリとしたが、イカンイカン。俺はプロデューサーだ。

プロデューサーがアーティストに恋するなんて・・・有り得るか。コム口諸島しかり。と、そんなことを考えながら

「それだけでできれば上等だよ」とだけ言った。

「おまつとさん。って2人だけか」ケイタがやってきた。

「なありヨウ見てくれよこの時計。スタンレーワークスつうメーカーが出した腕時計なんだけど、なんと万力つきなんだぜ」とケイタは腕を振ってみせた。

「おま、万力なんてアイテム、中学の時の技術の時間に聞いて以来だぜ。普通の高校生が使う瞬間なんて来るか？」

「いいんだよ。デザイン性で選んだんだから」

実は俺も雑誌でみかけて気になっていたのだがそんなことはケイタに言えなかった。クニオがひよっこり現れた。

「おう。買ってきたぜ。厚焼き玉子のふんわり明太子マヨサンド」  
「バ、俺はツナサンドだったろ」

「え。いつものやつコレじゃなかったっけ」

「まあいいや。とにかく会議を始めるぞ」

「おい、ヨウコちゃんは？」とケイタ。

「なんか今日用事あるってよ」

「じゃ、帰る」

「なんでだよ！」珍しくクニオがツッコんだ。

「さ、冗談はそれくらいにして。で、どうなんだ野ザルのバイト先での評判は？」

クニオが手帳を取り出した。

「えー。1ーBのスガワラ君。週2。で通っていたのが毎日。2

-Dのサイトウ君。昨日、野ザルにひとめぼれ。同じクラスのヤマギシ君も同様。3-Aのフカヌマ先輩。それらのウワサを聞きつけ明日お店に行く予定、3-Dのヤマダセ・・・」

「おっと。それくらいでいいや、俺らのクラスはどうだ？ケイタ」

「おう。ヲタク軍団に探りいれてみたよ。早速新人でカワイイ子入ったみたいな話してたから、『どこの学校だ？』って聞いたたら『わかんない、年上かも』だよ」

確かに、コンタクトをしてキチっとメイクをした野ザルは少し大人びた感じに見える。

「すげえぜ野ザル。モテモテじゃん。まあ、ヲタクにだけどな」

彼女は少しハニカんだ。ダサダサメガネだったが、俺は心の中でモエボタンを連発していた。イカン、イカン。俺はプロデューサーだ。「あと1週間ぐらいしたら、そのウワサの女の子はウチらの学校にいるって噂を流そう」

「そして、文化祭の萌えモエ選手権に臨むわけだな」

「その前に学校での野ザルの評価を少しあげておいたほうがいい。今のままとのギャップがいいかも知れないけど、男子の認知度は低い。『そんな子いたっけ』じゃダメだ。それに女子からのイジメはストツプしたけど、シカトが続いているみたいだし」

俺は野ザルをチラリと見た。あれからノリコとは話はしてないが、イジメをエスカレートさせずにシカトどまりにしているのは冷戦状態に持ち込んでくれている証拠だと思う。やってやるうじやないか

「そんな悲しい顔すんなよ。ヨウコの友達の浅田美代とも話つけておこなきゃな」

女子グループは大きく分けるとノリコ派とミヨ派に別れている。

「じゃあ、今から、男子にも女子にも認知度をあげつつ、好印象を与える。という作戦を発表しよう。名づけて『えっ罰ゲーム？クロノとタエちゃんみたいにラブラブ大作戦』だ」

「なんだそれ？」

「昨日ガantz読み返してたら思いついた。クニオ。お前が大活躍だ」  
「え？俺？」

「ケイタ、明日人生ゲーム学校に持ってきてくれ」

「オウケイ」

「野ザル、お前ちょっと不本意かもしんないけど、いきなりだが彼氏つくるぞ」

「・・・わかった・・・Pを信じてがんばる」

「おいおい、どういう作戦なんだよ」

「説明の前に今日の何某いくか。野ザル」

「・・・クロノ君アナタは生きて・・・」

野ザル。をプロデュース

「わお。ガンツを知ってるとはね」

「・・・カトウ君の方がタイプだけど・・・」

「残念ながらそんな男前は紹介できないけど」

俺はクニオの方をチラリと見た。

「まず、昼休みに・・・」

## 第7話「キャンディ・デイズ」

学校へ行くために自転車に乗ろうとしたら、サドルに一匹のカマキリがいた。危うくお尻で潰すところだった。それを想像した俺は一瞬鳥肌がたった。

「危ないぞ。よかったな。潰されなくて」

俺はおそろおそろ、カマキリを手で掴み近くの草むらに放り投げた。ひよつとしたら彼女（勝手にメスだと決めた。つうかカマキリは区別の仕方あったっけ）はこれから起こることの象徴なのかもしれない。暗示か、隠喩（かつこよく言えばメタファー）か。なんにしる、嫌な予感がした。

「大丈夫だ。多分、どっかの国じゃあ、カマキリは幸福を呼ぶ虫として崇められてるはずだ」

そんなことをつぶやきながら、俺は学校へ向かった。

葬儀場の側を通る。そういえば野ザルをプロデュースし始めてから、「今日は誰か死んだか」という確認はしなくなった。それがいいことなのかいまいわからない。それを「充実している毎日だから」と単純に言ってしまうのは何か違う気がした。学校に着き、教室へ入るとケイタが話しかけてきた。

「人生ゲーム持ってきたぜ」

「センキュウ」

「昼休みが勝負だな」

「ああ、クニオ昨日から緊張してるらしいな」

俺はクニオに目を向けた。机に座ったまま、下をみている。俺の登

校にも気づいていないようだ。

「野ザルは？」

「あいつは表情読み取るの難しいからなあ」

「なるほど。そんじゃ昼休み」

退屈な授業（といっても国語の岡山先生の「職員会議事件」の告白はおもしろかった。が、ここに書くほどのことじゃあ、ない）を4つこなして昼休みになった。

俺、ケイタ、クニオの3人は飯を食いながら人生ゲームをやり始めた。

「なんだかんだいって、木村カエラはカワイイ」

「ここら辺サクサク映らねえんだもん」

「俺ん家かろうじて」

「マジで！今度録画しておいて」

「砂嵐まじりのカエラちゃんでもいいのか」

「まあ、UA好きの俺は加藤ミリヤを薦めておくよ」

「だれだ？」

「知らないのか？今度CD貸すよ」

「加藤つつつたらローサじゃね」

「じゃあ、加藤茶でFA？」

そんな他愛もない会話をしながらも、俺達は緊張し始めていた。もうすぐ作戦が始まる。実は人生ゲームはやってるフリ、というか、一応やってはいるがあくまでそれは芝居だった。実際、今ビリはこの俺だ。そろそろいいだろう。俺はクニオに目で合図した。

「ドゥワ！負けた」

比較的大きい声でクニオが叫ぶ。教室の何人かがこちらを見た。よ

しその調子だ。

「じゃあ、罰ゲームなあ」

ケイタがニヤリと、これまた比較的大きい声で言った。ちよつと、わざとらしいが合格ラインだ。そして俺達はまたヒソヒソ話になる。

「いいか。いくぞ」

「オウケイ。まかしとけ」クニオが言った。深呼吸をする。

「マツジで〜！」

さつきよりも大きい声でクニオが叫ぶ。さすがにクラスのほぼ全員が一瞬彼に注目し、またそれぞれの世界へと入っていった。

「マジマジ、オオマジよ」ケイタはニヤニヤしながら言うがこれはクニオの迫真の演技をみてのことだった。

「じゃあ、ルーレット回すぞ」俺は人生ゲームのルーレットを回した。

「マジかよー。えーホントに？」クニオは叫んだ。この頃にはクラス全員が彼に注目していた。

「ほら、行けよ」ケイタが野ザルを指さした。

「えっ今？マジかよ」

クニオは野ザルの席まで行った。

「あの、えっとサルノさん……。ちよつといいかな」

「はあ、な、なんでしよう」

「ちよつと来てくんない」

野ザル。をプロデュース

2人はそろって教室を出た。途端に騒がしくなる教室。クラスメイトの男子が一斉に俺とケイタに話かけてきた。

野ザル。をプロデュース

「おい、なんなんだよ、あれ」

「まあ、ちょっとした罰ゲームでね……」

2・Bのカツマタクニオが罰ゲームで同じクラスのサルノシンコに告白し、OKもらっちゃって付き合うハメになったという噂はその日のうちに学年中に広まった。

## 第8話「ランニング・ロウ・テンション」

全ての授業が終わり（これまた午後の授業の数学で矢野先生の『恋のトライアングルの法則』という爆笑トークが炸裂したが、これまたここで書くほどのことじゃあ、ない）俺は自転車置き場へと向かった。自分の自転車をみると驚愕した。サドル部分にまたもやカマキリがいた。まさか同じヤツではないと思うが、やはりこれは何かのメタファーなのか。

「ちよつと！」

その声に振りかえるとそこにはノリコがいた。

「出たな。カマキリ女」

これだ。カマキリちゃんはこのことを予知していたのだ。メスのカマキリがオスを食らうように。俺もこの女子に食われちまうに違いない。

いや、違う意味で食われるならそれもいいか。

「ハア？何言ってるの？」

ノリコはプロレスラー風女ピン芸人並みのツッコミで切り返してきた。イカンイカン。妄想族になっていた。いつもの自分に戻らなければ。

野ザル。をプロデュース

「いやいや、こつつ側の話でゴワスよ。で、なんだい？珍しいじゃないかい。君から俺に声かけるなんてさ」  
「何を企んでるわけ？」

「えっ何の話だ？」

「とぼけないでよ、カツマタ君が罰ゲームであの娘と付き合っつてのは何かウラがあるんでしよう？」

「何を言ってるんだい？ジエニファー。アレは人生ゲームのビリの罰ゲームだよ。ルーレットの針がお前を指していたら、クニオはお前にコクってたんだけ。まあ、お前さんは断るだろうけど」

「ねえ、マーティ」

彼女は不気味に微笑んだ。つうか、知ってんじゃない。バック・トゥ・ザ・フューチャー。しかし、俺は彼女とつきあいはじめた頃、熱く語って薦めたのを思い出した。もしかして観てくれていたのか。イカン。また妄想族だ。

「ウチの弟が人生ゲーム持ってんのよねえ」

嫌な予感がした。カマキリちゃん。俺はほんとに食われちまうのかい？

「あのルーレットって矢印があるんじゃないなくて、針が固定されていて数字を回すんじゃないかった？」

やっぱり。イタイとこ突かれた。これは実は前の晩にケイタから電話で聞いて知った問題だった。俺がこの計画を思いついたきっかけとなった漫画「ガンツ」は人生ゲームに似た架空のゲームを使っていたのだ。ケイタは他のゲームにしようと思案したが、すんなり告白の相手を野ザルにするには、この方法が手っ取り早いと思っただし、そんなに細かいとこまで気にするやつはいないだろうという読みがあったからそのままいくことにした。しかし、ここに気にするヤツがいた。カマキリ女だ。ここまできると、ノリコの顔がカマキリに見えてきた。こうやって人は迷信やらジンクスを信じてしまうのだろう。今思えばシャーペンを倒してその先にいた女の子でもよかつたわけだ。クソッ。とはいえ、昨日のうちから、そのいいわけは

考えていた。

「ああ、そういうことね。数字の1を向いた女の子にコクるって指示したのよ。つうか、そんな細かいとこまで言われるとは思わなかったから、思わず『ルーレットの針』ってさっきは表現したのよ」

俺は、さっきの会話の間違いを思いだしていた。クソッ。さっきの会話でこのいいわけをすりゃあよかつたんだ。漫画の影響が強過ぎた。

「ふうん」

彼女はまだ疑った感じの眼差しを俺に向けていた。

「まあ、私には関係ないことだけどね」

「ノリコ！帰るぞ！」その時、校門のところまで一人の男子生徒がこちらに向かつて叫んだ。

「わかった！ちよつと待ってて」

「誰？つきあってたんの？」距離があるとはいえ2人の雰囲気は恋人同士のものだったが、なんとなく俺は聞いてみた。

「ウン。3年のオンミヨウジ先輩。L4の一人よ」

「L4？ずいぶん変わった間取りだな。キッチンがないなんて」

「何言ってるの？Leaf4の略でL4。我が風鈴倶流須高校のお金持ち4人組。あんた知らないの？有名よ」

おいおい。作者は「花より男子」までパクるつもりか。次はNANAあたりをパクるに違いない。俺はオンミヨウジ先輩の登場が今後L4との全面対決という構図への伏線ではないことを祈った。そしてようやく俺達の高校名がここで明かされた。ちなみに「ふうりんぐるす」と読む。

「そつか。じゃあ、彼は童貞じゃなかったわけだ？それともまだ、調査してない？」  
それとも・・・」

いつもの感じでおちやらけて言ったが、彼女の様子が変わるので話すのを止めた。彼女はうつむいている。泣いているのか？まさか、別れたときでさえ泣かなかった彼女が？まあ、あの時は俺がフられたからそれはあり得ないかもしれないけど。

「あんたホントバカね」彼女はうつむいたまま、震える声で言った。  
「あんたを嫌いになったのはあんたが、その・・・童貞だったからじゃない。あんたが嘘ついたからよ」

「えっ」この「嘘」とは俺が童貞と言ったことに違いなかった。まさか。俺が童貞ではないことは親友のケイタでさえ知らないはずだ。俺は学校では童貞キャラを守っていて、それで時にはイジラレキャラにもなる。という絶妙なポジションを作りだしているはずなのに。  
「なんで、お前知ってんの？」

彼女は答えず、愛しのオンミヨウジ先輩のところまで走っていった。

「なんなんだよ。いつたい・・・」こんなときはこんな独り言でも出るところだろうが俺はなにも言えなかった。多分これが普通だ。彼女は童貞と嘘をついた俺を嫌いになった。なんというか、「俺の嘘」で多少なりとも彼女を傷つけたと思っていたが、「嘘をついた俺」が彼女を傷つけていたなんて。こっちの方がはるかに罪は重し、彼女の傷も深い気がした。そしておれの心の痛みも。

「とりあえず、今はプロデュースだ・・・」俺はようやく小説らしいひとりのことをつぶやいて、自転車の鍵を探すためブレザーのポケットに手をつっこんだ。

野ザル。をプロデュース

## 第9話「サイン・イズ・ヴィクトリー」

ノリコとの全面対決のせいで、俺は見逃したが、その日、クニオと野ザルは一緒に下校した。その光景は誰もが見ることとなり噂はさらに広まった。しかし、作戦はまだまだ始まったばかりだった。俺とケイタは2人で「罰ゲームで1週間限定でカップルになり、野ザル（クラスメイト達にはまだこのアダ名は浸透させていないけれど）は意外にノリがよくて、その罰ゲームに参加してくれている」というのを噂にハサミこむことにした。その理由はまず、「野ザルをだましている」と思われると俺達が悪党になってしまおうというのがある。実際、「お前達の罰ゲームにしてはタチがわりいと思っただよ」。「サルノつてお前たちの遊びにつきあうなんて、意外とおもしろい娘なんだな」という意見がクラスメイトから出ている。第2に、あくまで自然に野ザルを俺達のグループに誘わせるため。というのがある。いきなり俺達男子3人組に女の子が一人加わるのは不自然過ぎる。ケイタに言わせれば罰ゲーム参加型も不自然だぜ。このことだが。Pとしてそれは無視した。第3の目的は野ザルのキャラ付けだ。クラスでの存在は「暗い」だけ。転校初日からイジメでもなんでもなく誰もが話かけづらい雰囲気は彼女は持っていた。その存在はそのまま「イジメの対象」へとシフトチェンジしていった。最初にノリコが「アイツ、暗いからなんかヤダ。皆シカトの方向で」のひとことで全てが始まっていることを同じクラスの浅田美代から聞いていたが、それはノリコがあくまできつかけただけで、本人には悪いがもしミヨが同じことを言っても悪い方向に行くに違いない。クラスという世界において、ある程度の力をもっている者に従うという構図は昔からある風景だ。しかし、そのシフトチェンジが完全に終わる前に俺のプロデューズが始まったのは幸いだっただと思う。今はノリコが完全命令でシカトをしているわけではない（実際同じニオイだと感じとられてしまった、同人誌が好きな女

子がたまに話しかけているが、お咎めはない。しかし、これは俺の  
宣戦布告のおかげかもしれない。もし、プロデュースが失敗したら  
彼女はイジメを再開するだろうか？いや、彼女はそこまで悪いヤツ  
ではないと思いたい）、いわゆるお子様特有の、「別にシカトして  
るわけじゃあ、ないしい。かといって話しかける必要もないしい」  
というきつかけ待ちの状態なのだ。説明が長くなったが、最初につ  
いてしまった「暗い」というイメージをこの罰ゲーム期間中に、払  
拭させねばならない。そう、エサ待ちのお馬さんたちにおいしいニ  
ンジンをおあげるのだ。

「そこで、お弁当大作戦だ」ここは理容ナカニシ。いつものメンバ  
ーでの定例会議だ。今日はヨウコも参加している。

「弁当？」

「そう。罰ゲームとはいえ、つきあっているつつ名目で野ザルが  
クニオにお弁当を作ってくるんだ。ギャグで。へえ。そんな女の子  
らしいところもあるんだ。と皆に思わせるところから始まる。ツンデ  
レで行きたかったけど、そこまでのプロデュースは必要ない。普段  
暗い子の新たな一面ってだけで壁がくずれ、とっかかりになる。問  
題は弁当だけど、ここはヨウコ。お前にまかせた。料理得意だから  
な」

幼なじみのよしみでたまにヨウコが弁当を作ってくれるおかげで、  
俺はクラスの男子から羨望の眼差しを浴びることができる。

「いいよ。明日、どっかで野ザル……。サルノさんに渡せばいい  
んでしょ」

「……。私自分でやってみたい……。あと……。野ザルでもいいよ。・  
」

俺以外の3人は驚いていたが、実は俺はこの答えを密かに期待して  
いた。

「……。でも。料理自信ない……。」

「私教えるよ。正直、私まだ協力してないと思ってたし。出番少な

いし」

「おいおい。ストーリーの心配をするのは俺だけで充分だぜ。ヨウコ。……ありがとう……」

「よっしゃ。明日はヨウコの家で料理特訓だ。あさってから作戦開始。今日は解散！」

帰り道、俺は野ザルと2人になっていた、その経緯は省くが、まあ、作者の粋なはからいってどこか。

「……Pいろいろありがとう……」

「なあに、俺も楽しんでるよ」

「……自分が嫌になる……この暗さ……別にトラウマもないのに……」

「おまえなあ。俺も最初は、性格もプロデュースしようと思ったけど、どうこうなるもんじゃない。人それぞれなんだから。俺のプロデュースは一見ヤラセに見えるけど、お前の『暗い』とこ以外の一面を皆に見せるっつう演出なんだよ。お前の今日の何某は俺のツボだったし、転校初日に、声かけなかったこと後悔してるぐらいだぜ。それにバイトもちゃんとやってるんだろ。お前自身、自分の違う一面をみつけれられたんじゃないか？」

彼女は静かにうなづいた。

「……でも自分はやっぱり普通じゃない……」

「普通っつうのは所詮、多数決の世界だよ。ひとつとってみれば、あくまで個人の意見だ。小規模アンケートの世界だぜ。世界は広い。お前を『普通』っついうヤツだっている。それが少数意見でも、それもまた個人の意見だ」

「……Pいいこと言う……」

それは作者が野ブタ。の原作を読み終えたせいだった。

「そうそう。おまえにわたすもんがあんだ。これ。『シーズ・オー・ル・ザット』っつう映画のビデオなんだけど、おもしろいよ。レイチエル・リークック最強。参考とまでは言わないけど、ダサイ女の子

「がカワイクなる話だし」

「・・・ウチにビデオがない・・・」

わーお。へヴィだ。

「そっか・・・。そうだ。プロデュースが成功したらプレゼントしよう資金も余るハズだし」

「・・・電動自転車もウチにはない・・・」

わーお。パーフェクト、完璧だ。

「さりげなく、欲しいものいうお前が好きだぜ」

俺はおちやらけて言った。

「・・・私も・・・」

俺は動きが止まった。私も？え？何？この展開？いや最終回にしてくれよ。そういうのは、今はノリコとの問題もあるつてのに。

「・・・冗談だ。そろそろ今日の何某だと思っただから・・・」

わーお。へヴィだ。作者め。一瞬本気にしたじゃねえか。

いつのまにか自分の家の前まで来ていた。

「ここ・・・おれんち。あっそうだひとつ聞いておきたいんだけど」

「・・・なに？・・・」

「お前、同じ名前の女の子と知り合っただよな。例えばバンドやってる女の子とか、その、グラマラススカイ的な・・・」

「・・・グラ？・・・いや、そんなことはないけど・・・なんで？」

「いや、なんでもない。それより明日、料理がンばれよ」

どうやら、まだNANAはパクっていないようだ。

## 第10話「ノッキング・オン・ニュウ・ワールズ・ドア」

ヨウコの1日料理教室を経て（ヨウコに言わせれば、自分の活躍がこれだけで語られるのは心外だろうが、まあ、待て。必ず出番は来るハズだ）、野ザルはクニオに弁当を作ってきた。

俺達はひやかす側にまわりつつ、「猿野ってけっこう家庭的やん。ほら、クニオ一緒に飯食ってこいよ」とクラスの注目を浴びるように仕向けた。みんな興味津々のようで、弁当をのぞきこみにくる。クニオはひたすら「うめえ。この肉じゃが」「ベタだけどタコさんウインナーは最強」「えつ。デザートまで」と、褒めたり驚いたりしていた。もちろんそれは素のリアクションであった。俺は少し嫌な予感がした。クニオが本気で野ザルを好きになるのはヤバイ。それは嫉妬ではなく、プロデューサーにさしつかえるからに他ならないが、それほど野ザルが魅力的だという証拠だ。

俺はどうやらとんでもないゲンセキをさらにとんでもない宝石にしようとしているようだ。そして、いつのまにかエンタの神様に出るようになったオリエンタルラジオのようには俺のプロデューサーから離れてしまうだろう。だが、それもいい。お気に入りのインディーズバンドがメジャーデビューして有名になってしまふ寂しさ感が伴うだろうが。

とにかく文化祭のメジャーデビュー前に俺は武勇伝を作り上げなければならぬ。次の日からは、野ザルとクニオ2人だけでなく、俺とケイタも一緒に飯を食うことにした。ごく自然に。さり気なく。

「今日の弁当もうまそうだな。でも昨日より手抜いてねえか？冷凍食品が多いし」

「・・・よく考えたら、罰ゲームの相手に本気を出しても・・・」  
「言ってくれるねえ」

「なあ、約束の1週間が過ぎたら、卒業式やろうぜ」野ザルちゃん

からの卒業」

「野ザルって？」

「猿野だから、野ザルでいいじゃんカワイイっしょ」

「・・・カワイくない・・・」

「おま、ナカニシじゃ・・・」

「まあまあ。ジョークだよ」

「・・・うん」

こんなバカ話をしながら、毎日を過ごしていた。次第に、クラスの皆もその雰囲気を受け入れ、ミヨのグループも俺達の輪に混ざるようになった。これは俺が誘ってみたのだが、裏情報によるとミヨのグループにケイタを好きなヤツがいるらしい。

まあ、いい。順調に作戦が転がり始めた。約束の1週間が過ぎても俺達は一緒に飯を食っていた。

野ザルの弁当作りは終わったが（最後の日、クニオは卒業記念弁当を寂しそうに食べていた）、俺達が野ザルを昼飯に誘うのに、もう何の違和感もなくなっていた。次第に輪はひろがり、いろんなヤツが俺達のところに来るようになった。

思えば男子と女子が一緒に飯を食うのはこのクラスになったて初のことだった。そして事態は昼休み意外にも急変した。いろんな子が積極的に野ザルに話しかけるようになったのだ。昼休みで浸透させた野ザルのキャラが気に入られ始めたのだ。俺達が解禁した「野ザル」というアダ名で呼ぶヤツまで現れた。

相変わらずノリコグループが「何、調子のってんのよ」目線を送っていたが、ある日ノリコが話しかけてまたもや事態は急変した。これは俺にとっても驚くべき事態だった。こうして、野ザルは俺達のクラスでの認知度は確固たるものとなった。そして、決戦の文化祭まであと10日とおしせまった日、俺達は理容ナカニシにいた。

「しかし、ノリコは怪しいな。なにかウラがありそうだな」とケイ

タが言う。

「その辺、どうなの？リヨウはなんか話ししてない？」とクニオが俺にフツてきた。

「いや、何も。野ザルは？どうだ？話ししてみて？」

正直、自転車置き場での出来事以来、気まづくなり過ぎて会話らしい会話はしていない。

「Pの話してた」

「なんだって？」

俺は一瞬ドキリとした。

「最初無視してゴメンね。って言ったあと、あなたは最初に仲良くなった人がホントにいい人でよかったねって」

おれは思わずテレ笑いをしたが、ケイタは

「ますます怪しいぜ。リヨウを褒めるなんて」と疑った。

おいおいそれは元カノどころか俺まで否定してないか？

「でもさ、ノリコと和解したなら、もう萌えモエ選手権に出る必要なくねえ？」

クニオが素朴な疑問をぶつけてきた。

「仮にノリコのセリフが本当でも、ここまで来たからには出たいだろ？」

「うん。おもしろそうだし。バイトで鍛えたモエパワーを發揮したい」

「最近じゃモエって言わないらしいぜ。ハアハアだつてよ」クニオが言った。

「ハアハアつてどう使うんだよ」

「例えばな『野ザルタンにハアハアですよ』ってな具合だよ」

「普通にキモインですけど」野ザルは表情を変えずに言った。

「あちゃー」

「たいへんたいへん！」ヨウコが息を切らして部屋に入ってきた。

「遅いな。あ、そういえば萌えモエ選手権のエントリー頼んでたんだっけ」

「それがね、エントリーした人、野ザルちゃんだけなんだって」

「ひとり！ヤッバイ。優勝決定じゃん！ノリコのやつ驚くぞ」

「クニオ、お前相変わらずだな。競う相手がいなければ、選手権は中止だよ」

俺は最初にこの提案をノリコにしたときの妙な笑顔を思い出していた。クソッ。ノリコはこれをヨんでたわけか。これじゃあ優勝したくてもできない。

「そう。今日が締め切りだったんだけど、中止にするって部長が言ってた、やっぱり女子はキモがって参加したがないしコッチの方が人気あるって」

ヨウコはもう1枚の紙をみせた。

「ミスフル？なんだこれ、確かに女子にはテニブリと並んで人気あるって聞いたけど」俺はその紙を手にとった。

「バツカ伝統ある『ミス・フウリングルス高校』のことだよ。去年はヨウコちゃんが選ばれたんだぜ。なんでお前はそんなこと知らないんだよ」とケイタにツッコまれた。

「主人公ってのはそういう情報に疎いもんだよ」

「なんだ。そのいいわけ」

「まあ、いいさ。これで問題は解決した。出るコンテストが変わっただけじゃねえか」

「まさか、お前。野ザルを出そうってわけ？」

「クニオ。仮にもつきあった仲だ。野ザルの魅力は充分わかってるだろ」

「だってこれにはノリコも出るんだぜ。去年ヨウコちゃんと2、3年差し置いて新入生で最後まで争ったノリコが。多分、ノリコはリベンジだろうし。ヨウコちゃんが前年優勝で出られないぶん、今回優勝の可能性はあるぞ」

「ちょうどいいじゃねえか、ノリコと直接対決できる。出るだろ、野ザル」

「Pが言うなら」

「よし。コレ、エントリーシートにもなってるんだろ  
俺はペンを取った。」

「……推薦者はセン……マル……リョウと。ヨウコ」  
「そっぴゃ最初はミナミって呼んでたな。オレ。ま、いいか。」

「これ、頼む」

「わかった。まだ間に合うと思う」

「事前の審査ってねえの？」

「人気あるっていつても、よほどの自信がないと参加しないからエ  
ントリー数は少ないの。毎年8人ぐらいらしいわ」

なるほど、来るもの拒まず恥かきたいやつはどうぞってやつか。

「じゃあ、よほどヨウコちゃん自信あったんだねえ」クニオが珍し  
く皮肉を言った。

「私は……。どうしてもって皆に言われて」

「まあまあ。しかし勝負する場所は決まった。少し作戦変更しなき  
やな。このミスフルのシステムも調べておかなきゃ。その前に今日  
の何某だ！野ザル」

「えっ。なんも思いつかないんすけど、P」

「これは意外だな。でも野ザル、気づいてたか？」

「えっ？」

「お前のセリフから『……』が無くなったんだよ。それだけで俺  
は充分だよ」

## 第11話「マミー・フライ・マミー」

文化祭までの10日間は今までよりも忙しかった。萌えモエ選手権はフタク君達10人によるモエボタン満モエを目指せばよかったので当日勝負でよかった。計算的にはちょうどウチのクラスでメイド喫茶をやることになっていたので、そこでお披露目、注目を浴びてそのままメイド服で審査、優勝。だった。

が、しかし。ミス・フウリングルス高校は違う。当日は結果発表のみで、1週間前からの全校生徒による投票で全てが決まる。俺達は急遽、選挙戦に参加せねば行けなかった。こうなれば、出し惜しみする必要はない。俺達はメイド喫茶で噂の美女は野ザルであることであっさりバラした。といっても一部のマニアには疑惑が沸き起こっていたのタイミングにはよかった。

これに新聞部が食いつき、文化祭前、最後の校内新聞の「今週のエンジェル」に取り上げられ、知名度は学校全体に知れ渡った。昼休みの見物人は日に日に増えていった。しかし、学校内で変身はさせなかった。当日にお披露目するという約束で、全校生徒の期待度を投票に結びつける作戦に出たのだ。

これはけっこうな「賭け」だったが、俺はそれにノることにした。そんなこんなで、なんとか、前々からのエントリー組に何とか追いついたと思っていたが、思わぬ計算違いがあった。それは野ザルの異常な人気ぶりだった。新しもの好きな若者にとつて、彼女は注目の的だった。そして、文化祭前日には「今年のミスフルは同じくラスのハミガノリコとサルノシンコの一騎撃ちか」とまで言われるようにまでなった。

「いよいよ明日だな」

「うん」

俺と野ザルは2人で帰っていた。ケイタとクニオは「フォーク&リフト」の単独ライブの練習。ヨウコは自分のクラスの出し物の準備で、まだ学校だった。それともやっぱり、作者の粋なはからいなのだろうか。

「俺のプロデュースが始まってからお前ホントよくがんばったよ。正直俺も驚いてるよ」

「私も」

「でも、まだ考えてた作戦があっただよな。『ホワイトバンドと見せかけて実は野ザルバンド作戦』だろ、『実は歌がうまかったバンド名はメイド・イン・ジャパン作戦』に『なんだかんだいってプリングルスは初期のピザ味最強作戦』『玉山鉄二の役柄ってひと昔前ならカッシーこと柏原崇がやってたと思うのは俺だけか？作戦』

・・・

「P、後半からわけわかんない」

「ま、いいや、明日コレかけて出るよ」俺は内緒で買っておいたモノを渡した。

「メガネ？」

「そう。余った予算でね。ホントはビデオデッキにしようと思ったけど、メガネ萌え大作戦だ。まあ、もう結果出てるけどな。でもカワイイだろ。あ、もちろんダテだから、コンタクトは持ってこいよ」彼女はピンクの淵のメガネを手に取り眺めた。

「俺も買ったんだぜ、俺のは100円ショップのだけど」

俺は黒ブチメガネを取り出してかけてみせた。

「どうしたんだ？急に？」

「いや、自分もプロデュースしようかと。似合う？」

「ひよっとしてアジカン意識してる？」

「どっちかつつと音速ラインだな」

「じゃあ、くるりの方向で」

「最近メガネかけてねえよ。じゃあ、最後の今日の何某行くか」

「寂しいな」

「え」

「今日で最後かと思うと」

「バツカ、そう何度もネタ言うのもつらいだろ、いいか？俺たちはもう親友だ。三橋流に言えばマブのダチンコだよな。これからはこう思えばいい。俺達が1日の最後に交わした言葉。それが、今日の何某だ」

「・・・P・・・ありがとう」

「だから『・・・』は止めるって。お前の『・・・』が無くなつたのは単に作者が忘れたからじゃないぞ。お前が変わったから、変れたからだ」

「今の『・・・』は初めてあったときのとは違うよ。感極まって」「わかったよ。じゃあな」恥ずかしながら泣きそうだった。作者も。

野ザルと別れた後、俺は例の葬儀場へ向かった。なんとなく。ミスチルの歌詞じゃないけれど、どうしようもなく、ひとりになりたかった。閉まつた葬儀場の扉はガラス張りで、中が見えた。遺影が見える。「今日も誰か、いや、あの人が死んだのか」

そんな事を思った。今までは「故く葬儀場」の看板や、「く家」と書かれた提灯で「人の死」を確認していたが、俺は今初めて、きちんと生きた人のきちんとした死をみつめているような気がした。後ろに気配を感じた。振りかえると女の子が立っていた。かわいらしい感じで幼さの残る顔にショートカットが伸びかかった髪が妙に合っていた。

「何してるんですか？」

彼女が声をかけてきたことに驚いたが、俺はいつもの調子で答えることにした。

「こんな時間に逆ナンかい？子供は家に帰る時間だよ」

「同じ年です」

「何で知ってんのよ」

「いや、あのその。ナカニシの・・・」

「ナカニシのおっちゃんが？」

「そう。姪っこです。名前はマーサっていいいます」マーサ。

「まったく最近のガキはシャレた名前が多いな。俺は自分の子供には絶対「子」ってつけてやる。例え男でも」と言っていてやったが、この娘は不思議と憎めないなと思ったのも事実だった。もう最終回も近いのに新キャラを出す作者の意図もわからなかった。

「ほんとにいい？カワイイじゃないですか。マーサ」

「自分で言うなよ。まあ、どういう漢字かにもよるけどな。なんて書くんだ？」

「それより、ここで何してたんですか？」彼女は話題を元に戻してきた。

「いやさ。なんつうか。今、俺が死んだとしても、今の俺の顔なら遺影として全然誇れるなあって。思ってたわけよ」

「ふうん。でもあんまり死ぬとか言わないほうがいいですよ」まさか。

「君、もしかして不治の病いとか？」

「いえ、ただ私の存在が・・・」

存在？なんのことだ？まあいい。セカチューもパクってないようだ。

「あのパパ・・・パパ」

「パ？」

「パイナップルは好きですか？」

何だ突然？

「好きだよ。パイナポー。でも。嫌いだと思ってたナスの味も気に

なりはじめたし、昔から好きだったキウイも捨てがたいしなあ」  
「それってもしかして女の子のことですか？」

凶星だ。

「慎重に選んでくださいね。私にも関係してますから」

何言ってるんだコイツ。俺はまた遺影を見つめた。とても穏やかな笑顔だった。そうか。例え、いつ死んでも。ここ1ヶ月の日々を過ごしてきた俺の遺影はあんな笑顔のハズだ。それを伝えようと振りかえるともう、彼女はいなかった。帰りにナカニシに寄る。店の看板をしまおうとしていた、おっちゃんに話しかける。

「おっちゃん。さっき姪っ子さんに会ったけど……。なんか不思議な娘だった」

「姪？ああ。そうか。いやな、遠いところに住んでいて、会いに来たんだよ」

「そう」

「会うなと言ったのに……」

「えっ」

「いや、なんでもない。それより明日は多分嵐がくるぞ」

「まさか」

嵐のような1日になりそうな予感はあるけれど。

## 第12話「ノー・ディスタンス」(前書き)

いよいよ最終話です。お付き合いいただきありがとうございます。  
と言いつつ、もうひとつのエンディングを用意してあります。

野ザル。をプロデュース

## 第12話「ノー・ディスタンス」

30 過ぎても不思議キャラを演じられる、ワクイエミはステキだ。やっぱりなんだかんだ言っただけで女子アナはトベよりミナコよりアヤパシよりウツチーだ。とそんなことを思いながら文化祭は始まった。俺らのクラスのメイド喫茶は盛況で野ザルもメイドの格好で接客をしていた。ステファニーの客もいるらしく（情報によると、噂は秋葉原まで広まり、そこからの客もいるらしい）。生徒からは「野ザルに投票したからね」「応援してるよ」との声もあり、まずまずだ。ノリコはといえば完全に裏方でコーヒーメーカーを前に悪戦苦闘していた。違うよ。そのボタンじゃない。

「余裕だねえ。ノリコちゃん」

俺はノリコの隣りへ行って、正しいボタンを押しながら言った。

「ありがと。まあ、投票は終わってるしね」

「いやあ、ノリコちゃんのメイド服見たかったなあ」

「つきあつてるときに言ってくれればいくらでもみせたのに」

「やっぱり予想通りの答えだねえ。じゃ、チャンスがあつたら、チャイナ服希望」

「ウーム」

「考えるのかよ!」

「スクール水着なら・・・」

「アリなのかよ!。お前、『潜水艦事件』の時のヨウコだって嫌がったのに」

「あの時はおもしろかったわね。その後、私達つきあい始めたんだよね」

『ミス・フウリングルス高校へのエントリーされている方は体育館

まで』

話がヤバイ方向へ向かっていたのでいいタイミングだった。野ザルと目が合う。黙って俺は頷いた。教室を出る野ザル。俺も体育館へ向かうか。渡り廊下から外を見ると風が吹き荒れて校庭の木々の葉はもとより枝まで揺らしていた。わーお。へヴィだ。ナカニシのおっちゃんのいう通り、今夜は嵐かもしれない。体育館の外側にあるあの時計に落雷したりして。体育館では、ケイタとクニオの漫才が始まっていた。意外に客が多いのは多分この後、「ミス・フウリングルス高校」の投票結果発表があるからに違いない。

「はいどうも。フォークニオです。えー今日はね。相方のリフトンケイタがどうしても出られないっつうねことだね。ワタクシひとりだね・・・」

いつものツカミトークから始まった。この後ケイタがいよいよ俺いますやん。と登場してくる。ほら出てきた。ネタが始まった。ここで書いても読者の方は失笑するだけなので体育館は爆笑の渦に巻き込まれた。とだけ伝えておこう。30分にわたるネタとコントも終わり、いよいよ始まる投票結果。だ。プロデューサーとして最後に一言声をかけたかったが、推薦者という名目でも本番直前には会えなかった。ミス・フウリングルス高校のシステムは意外に厳しく、全て、生徒会が仕切っておりそれに関する規約は30項目ぐらいあった。

「いよいよだな」舞台を終えたケイタとクニオが俺の隣りに座った。場所としては体育館の真中あたりだ。生徒会の役員たちが出てきた。

「さあ、みなさん。お待たせしました！これより今年度、ミス・フウリングルス高校のエントリー者の入場です！」ステージ横から女の子が7人出てきた。3番目に野ザル。4番目はノリコだった。

「おい！リヨウ！」ケイタが何か異変に気づいた、  
「なんだ？」  
「あれ見ろよ」野ザルの背中を指差す。

エントリーした者は全員生徒会が用意するドレスを着ているのだが、野ザルのドレスの背中ของ ファスナーが壊れているっぽい。歩く度に、落ちてきている。

「まさか、お前、最後に『ポロリン大作戦』なんて・・・」  
「考えてねえよ！」

俺はもう駆け出していた。

「ノリコのヤツ・・・」ケイタがつぶやくのが聞こえた。

クソッ。なにか対策は？おい。考える。俺。閃いた。俺。

「ケイタ！腕時計！」

「え！」

「いいからパス！」

ケイタは察してくれて腕時計を外すと俺の方に投げた。俺はその腕時計を受け取りながらステージに上った。ざわめく場内は無視した。間に合うか。俺。並んでいた女の子たちも驚いている。あわててノリコが野ザルの背中に手を回した。クソッ。そうはいくか。俺はノリコの手をふりほどこうとしたが、驚いた。ノリコは壊れかけたファスナーをしつかりと抑えていたのだ。

「サンキュ。ノリコ」俺はそれだけいうと野ザルの後ろに回った。ケイタの腕時計の側面についている万力を緩めて、ファスナーを布

ごとはさんだ。ケイタ、普通の高校生が万力使う瞬間がやってきたぜ。そしてナイス伏線。あとは読者が第6話に出てきたこの腕時計を覚えているかだ。

「とりあえず、応急処置は終わり」俺はニヤリと笑って観客に「サービスタイムは終了。ささ。続き続き」と司会者に促した。

司会者はとまどいながらも続けてくれる。と思った。

「しかしですね。この時点で猿野さんは失格です」ステージから飛び降りようとした俺は司会者に向き合った。

「ちよつと待つてよ。なんだそれ」

「規約の19条3項目にあるんですよ。妨害行為が発覚した場合そのものは失格となる。たとえ事前投票で優勝していたとしてもね」

「妨害？これは緊急事態つつうんだよ。俺は彼女を守ろうとしたんだ。それに妨害したというなら、それは俺で。彼女は関係ない」

「あのですねえ。あなたが舞台上上がったのは彼女がきっかけです。これは妨害意外のものでもない」ひよつとしてノリコはここまです計算して助けたフリをしたのか。

「ふん。俺が『推薦者』でもか。22条2項目推薦者は特別な事態に限り、結果投票当日に意義がある場合、生徒会に意見を言う権限がある。この状況は特別な状態じゃあ、ないかい。妨害というなら彼女のドレスに細工したやつだよ」

「あなたが犯人を連れてこれるならね」俺はノリコをチラリと見た。証拠はない。

「それに、あなたは推薦者ではない」司会者はエントリーシートを見せてきた。なんだって。俺は確かに書いたぜ……。エントリーシートを見て、俺はひとつの疑問を持った？なぜ彼女の名前が？まさか？

「でもよ、それに、第16条4項目・・・」

「もういいよ。P。この思い出だけで充分だ」

「野ザル・・・」結果が全てではない。なんて負けたやつと言いつつだと思っていた。実際俺は負けたときのいいわけにしていた。でも今はこの言葉を信じるしかない。

「わかったよ」俺はステージを降りた。

「よくやったぞー」拍手が飛び交う。これだけで充分だ。

「えー。たいへんお待たせしました。それでは発表します。今年度ミスフウリングルス高校は・・・」ドラムロール。俺はステージの1番前で見える形となった。ケイタとクニオがやってくる。

「クソっノリコのやつ」

「いや、彼女が犯人じゃない」

「なんだって？」

「それに勝算はまだある」

「え」

「最後の作戦だ」

司会者タメにタメて口を開いた。

「ハミガノリコさんです！」

拍手。拍手。

「それでは、ハミガさんにひとこと・・・」

その時ステージに上がる2人組がいた。科学部の部長とアニメ研究部の部長だ。

2人は司会者からマイクを奪いとると、しゃべり始めた。

「えー。突然ですが、ここで第1回萌えモエ選手権の優勝者発表し

ます。これは本日文化祭にきた生徒、その他のお客さんからの投票で決めたものです」

「リヨウ。お前・・・」

「俺は科学部とアニメ研究部にシステムの変更を提案しただけだぜ」

「・・・サルノシンコさんです！」

拍手。拍手。

「さ。ステージ行くぞ！」

俺達はステージに上がって野ザルと肩を組んで、ガッツポーズを取った。観客の拍手。拍手。最高だ。俺はノリコの側まで言った。

「約束通り、萌えモエ選手権で優勝したぜ。ごめんねえ。ノリコちゃん。主役の座を奪っちゃって。これからも野ザルをよろしくね」

「もう、仲良くしてるわよ」

「わかってる」クニオがやってきた。

「おい！ミスフルの方の投票結果みてきたけど・・・。僅差で野ザル負けてた。どっちにしる・・・」

「あなたのプロデュースがもつと早かったら負けてたわね」

「まあな。ところでさ。あの。なんで、俺のあの秘密知ってたの？」

「さあ、その辺は続編で明かされるんじゃないの？」おいおい。

俺はステージを降りた。ヨウコがかけよってくる。

「スゴイ。よかった」

「作戦は失敗か？」

「え？」

「クニオが見たらしいんだ。お前が野ザルのドレスに・・・」

「・・・ごめんなさい」

「やっぱり。おまえか」

「え？」

「カマかけたんだよ。クニオは何も見てない。俺がお前を疑ったのは推薦者の名前がお前になってたからだよ。エントリースーツは提出後、生徒会室に厳重に保管される。書きかえるタイミングはお前に渡した後しかない。自分だと疑われないように自分の名前書いたんだろ。今日は控え室には推薦者でさえ入れない。しかし、前回の優勝者は別だ。発表の後の授賞式では前回の優勝者が授与することになってたから、控え室にいた。まあ今はそれどころじゃないけど」

俺ははまだ野ザルを囲んで盛り上がるステージを見た。

「ごめんなさい。L4の・・・フドウ先輩から・・・言われて・・・断れなかったの・・・写真をバラまくって・・・」

L4？写真？バラまく？クソ？作者は続編でL4と全面对決させるつもりか？それとも意外なラストを迎えるための理由作りか。まあいい。

「そっか。その話は後で聞くよ・・・でもな。これくらいじゃ、2人の友情は崩れないぜ」

俺はそれだけ言った。クソッ。カワイイ女の子には弱い。

「おい」ケイタ達がやってきた。

「見事な大逆転だぜ」

「ありがとうP」

「これで、優勝できなかった思い出も優勝できた思い出もできたな」  
「うん」

「おいリョウちゃん」ケイタはニヤニヤしながら話しかけてきた。  
「なんだよ」

「あのさ。後輩から聞いたんだけど1年にデブのいじめられっこが

「いるらしいんだ」

「おいおい。まさか。」

「俺は続編を匂わせる終わり方は嫌いなんだよ」

「またまた。バック・トゥ・ザ・フューチャーが好きなくせに」

「あれはだなあ。続編の意図はなくてだな。主人公の冒険はまだまだ続く……みたいな意味で作ったんだよ」

「いいじゃん。それ。主人公の冒険はまだまだ続くで」

オウケイ。まいったよ。降参だ。

「そいつの名前は？」

「よくぞ聞いてくれた。花野草男だ」

「じゃあ、次は野バナ。をプロデュースだな」

「おしまい。だけど」もうひとつのエンディング」に続く。

## 最終話「もうひとつのエンディング」

「まあ、そんな感じの学生時代だったな」

もう47才になった俺はリビングで娘に語っていた。

「でも、どうしたんだ急に。パパの学生時代を知りたいなんて」

「ん。ちよつと……。パパとママの出会ったころの話を聞きたかったの。ねえ。パパ」

「ん？」

「どうして、パパはその時、ママの事を選んだの？」

「それはだな……。」「

「あなた。遅れるわよ」

妻がリビングに顔を出した。今日は同窓会だ。ひさしぶりに皆と会える。

「話の続きは今度だな……。留守番大丈夫か？」

「大丈夫よ。もう子供じゃないんだから」

娘の麻亜茶（マアサ。と読む。バツク・トウ・ザ・フューチャー好きな俺は「マーティ」と読ませたかったが結局妻に反対された）

「でも、この間、夜中抜け出してただろ。パパは騙せないぞ」

「バレてた？ナカニシのオジ様に呼び出されてジャスコの駐車場に行ってたの」

ナカニシのおっちゃんもだいぶん歳をとったが、まだまだ現役で店をやっている。

「なんかね。科学の実験だつて」

駐車場？科学の実験？なんか気にかかる単語たちだな。そういえばナカニシのおっちゃんも最近、店の駐車場をしめきつて俺に見せてはくれない。チラツと見えた限りでは、いつも乗っている車とは別にもう1台車が停まっていた。あれは……。

「デロリアン？」

「えっ何？」

「いや。なんでもない。で、実験つてなんだ」

「それは秘密。ささ。はやく行つてきなよ。同窓会」

マーサはショートカットが伸びかけた髪をなびかせて自分の部屋へと向かった。

マーサ。はて。なんだろう。この懐かしさ。どこかで……。

「まさか、作者が最後の最後でパクったのは……」

「あなた、行くわよ」

「お、おう。ジエニファー。今いく！」

「マーティ急いで！」

やっぱり俺の妻は、俺の事をわかってくれている。

30年前、文化祭前日、理容ナカニシにて。

「パパに会ってきつちゃった」

「マーサ！。あれほど会うなと言ったのに」

「まあ、いいじゃない。パパって若いと意外に男前なんだね。マーサのタイプじゃないけど」

「マーサちゃんめっちゃめっちゃリヨウのタイプだと思っけどな。ママにも似てるからか。まあ。とにかく2人の出会いを邪魔しないでくれてよかった。それよりも、明日は大事な日だぞ。お前が未来へ帰れるかどうかの瀬戸際だ」

「文化祭見学してもいい？」

「いかん。いかん。ただでさえ、体育館に落ちる雷を利用するつてのに。ニアミスもいとこだ」

「はあ、若い頃のマママも見たかったなあ」

30年前の俺はそんな事があつたとはつゆ知らず、文化祭を迎え、野ザルのプロデュースを終え、野バナもプロデュースした。実は冬休みに入る前に変なヤツに絡まれる事件にみまわれる。本当に変なヤツだった。俺の大事な友人の命を救ってくれたけど。しかも、そいつはL4と全面対決したらしい。もし、続編が出るなら、作者は俺にその役をさせなかつたわけだ。そんなこんなでいるんなことがあつた。あと、何十年かしたら、俺も遺影になっちまうだろう。その時は言うまでもなく、最高の笑顔に違いない。

## 最終話「もうひとつのエンディング」（後書き）

これでようやく最終回です。最後までおつきあい頂きましてありがとうございました。ご迷惑をおかけしました。ただいま、続編執筆中です。主人公が変わりますがここでの登場人物も出てくるいわばスピノフ的な作品です。お楽しみに！がんばります。

野ザル。をプロデュース

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7784c/>

---

野ザル。をプロデュース

2009年7月1日21時21分発行